

機関番号：12501

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20720090

研究課題名（和文） 近代ロシア国家成立期における言語文化と視覚表象

研究課題名（英文） Verbal and visual representation in 18<sup>th</sup>-early 19<sup>th</sup> century Russia

研究代表者

鳥山 祐介（TORIYAMA YUSUKE）

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号：40466694

研究成果の概要（和文）：

18 世紀-19 世紀初頭のロシア文化を、同時代のヨーロッパ文化の状況を参照しつつ、文学と視覚文化（絵画や庭園、光学など）との関連の中で検討することで、近代ロシア研究に新たな視点を提供した。現時点で 2 本の論稿が執筆された。学会、シンポジウム、研究会等における発表、海外の研究者や歴史学など他分野の研究者との交流などを通じて、狭い意味での専門分野にとらわれない研究の遂行と研究成果の積極的な公開に努めた。

研究成果の概要（英文）：

This research offers new insights into modern Russian culture by investigating links between literature and visual culture (fine art, gardens, optics etc.) in Russia during the 18<sup>th</sup> – the early 19<sup>th</sup> centuries in European cultural context. At the moment two papers based on this research have written. Presentations were also given at the conference, the symposium and several meetings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：ロシア、18 世紀、19 世紀、視覚文化、風景

## 1. 研究開始当初の背景

## (1)

ピョートル一世の西欧化を契機として近代ロシア国家の基礎が築かれた 18 世紀は、近代以降のロシア文化を考える上で鍵となる非常に重要な時代でありながら、文学・文化史の側からのアプローチによる研究が日本では極めて遅れていた。

## (2)

一方、ロシア本国ではこの分野にも研究蓄積があるものの、特にソヴィエト期の研究はテキスト・作品分析という伝統的アプローチが主流であったため、多くの成果を上げつつも、作品が前提としていた社会的・歴史的知識の多くを現代の読者が共有しないことに起因する 18 世紀ロシア文学の「難解さ」を

払拭できず、結果としてこの時代のロシア文学を、専門研究者以外の関心の薄い領域にしてきた。また、西欧文化への視点や近年の欧米の文化研究の方法論への目配りが不十分であった点も、この時代のロシア文学に対する理解を偏ったものにしてきた。近年はロシアと欧米の研究者の研究交流も進み、状況にはかなり改善が見られるが、この分野の研究はさらに広く、多面的に行われる余地を残している。

(3)

そのような中で研究代表者がこれまで試みてきたのは、汎ヨーロッパ的文脈の重視や分野横断的手法など、比較文化論的な視点・方法論を取り入れることで18-19世紀前半のロシア文化研究に新しい地平を切り拓くことであり、その中で特に注目してきたのが視覚文化、とりわけ「ピクチャレスク(絵画性)」や「崇高」の問題であった。また、日本学術振興会特別研究員として研究に携わった平成18年4月～平成19年9月の間には、18世紀ロシアの詩文学と宮廷儀礼や戦争といった当時の政治的コンテキストとの関連性について一定の研究成果を上げて複数の論文を発表した。

(4)

とはいえ、これまでの研究は、ピクチャレスクや崇高といった視覚表象の問題とその政治的・社会的ファクターとの有機的な連関を示すには達しておらず、示唆するに留まっていた。研究代表者が本研究において新たに課題とするのは、さらに広範な一次文献を読み込むことによってこれら個々の問題に関する考察を深めると同時に、そのことを通して、18—19世紀前半のロシア文学に表れていると考えられる美学的要素と政治的要素との複雑で構造的な絡み合いをも明らかにすることである。

## 2. 研究の目的

(1)

本研究が目的とするのは、一部の作家の作品を除き専門研究者以外にはほとんど知られていない18-19世紀前半のロシア文学を、「ピクチャレスク」「崇高」など視覚文化やロシアの政治文化とも関連するいくつかの問題を考察の鍵としつつ表象論の枠組みの中で解き明かすことで、近代以降のロシア及びヨーロッパ文化に関するより深い理解に資することである。

(2)

本研究では特に、18世紀ヨーロッパの自然

観、美的感覚を決定した重要な要素である美意識「ピクチャレスク」に注目する。文学作品をはじめとする様々な領域の当時の文献の分析を通して、ロシアにおいてこの概念が展開していった経緯について検討し、18世紀後半以降のロシアでこういった自然観や美的感覚が形成され、それが文学作品等どのように様式化され、自明のものとして認識されていったかを明らかにする。同時に、当時のロシアの社会的・政治的コンテキストの中で、ロシア文化のアイデンティティとこの概念が結び付いていく過程も明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1)

本研究のテーマに関連する文献資料をモスクワのロシア国立図書館、サンクト・ペテルブルクのロシア国民図書館をはじめとする内外の図書館で収集し、読解を行った。またかつて帝政ロシアの領土内にあったため18-19世紀ロシアで刊行された文献を多数所蔵するヘルシンキの国立図書館をも積極的に利用することで、資料収集に効率化を図った。

(2)

研究会や学会発表の場を利用して意見交換を行った。特に、日本のロシア史研究者の中心的な学会である日本ロシア史研究会や、研究代表者の所属機関である千葉大学の史学科によって主催されたシンポジウムなど、歴史研究者が主体となる場において研究報告を積極的に行い、文学研究とはディシプリン異なる分野の研究者からの意見を仰いだ。このことを通して、本研究が文学研究の枠を超えた汎用性を持つものとなるべく努めた。

(3)

ロシアや欧米の研究者との研究交流も続け、2009年には研究代表者が日本に招聘したオックスフォード大学教授のアンドレイ・ゾーリン氏と意見交換を行い、当研究の内容に関して多くの示唆を得た。

また2011年1月初旬には英国ホデスドンで開催された英国スラヴ東欧学会の分科会である「18世紀ロシア研究グループ」に参加し、元ケンブリッジ大学教授のアンソニー・クロス氏、ヨアヒム・クライン氏(カリフォルニア大学バークレー校)、アンドレアス・シェーンレ氏(ロンドン大学)など多くの研究者と意見交換を行った。特に本研究の内容を補強する様々なディテールや先行研究について幅広く情報を得ることができた。

#### 4. 研究成果

##### (1)

本研究の成果のうち、国外の研究に最も大きなインパクトを与えたのは、18世紀ロシア最大の詩人と言われるデルジャーヴィンの作品における視覚的要素に関する研究である（[雑誌論文]①）。「ピクチャレスク」との連関や当時の支配的な視覚概念のあり方をも射程に入れたこの研究は2011年にロシアで出版されたタチャーナ・スモリャローワ（コロンビア大学）による大部の研究書《Зримая лирика. Державин》（視覚的な抒情詩：デルジャーヴィン）では4箇所 で引用されるなど、欧米、ロシアの研究者より一定の評価を得た。

##### (2)

視覚表象と文学の連関や崇高論に関する問題意識の延長線上に、プーシキン「スペードの女王」の中の視覚、光学的要素を読み取る研究を行った。本研究で得られた18世紀ロシアの視覚文化に関する知見をプーシキン研究に応用したもので、「近代以降のロシア及びヨーロッパ文化に関するより深い理解に資する」という点で一定の成果を挙げた（[雑誌論文]②）。

##### (3)

18世紀-19世紀初頭のロシアにおける風景表象と「ピクチャレスク」、およびナショナル・アイデンティティをはじめとする政治文化との関係については、歴史研究者を主たる対象とする二つの報告で考察を試みた（[学会発表]①②）。②の要旨は「ロシア史研究」第88号（2011年刊行予定）に掲載が決定しているが、この問題に関する研究成果の一部は来年度以降に論文として発表される予定である。

##### (4)

風景表象とナショナル・アイデンティティとの関係についての研究の成果は、本来この研究の枠外にあるヴォルガ川の表象に特化した研究にも多くが活かされている（[学会発表]③④）。これに関しては平成23年度に英国の「18世紀ロシア研究グループ」での報告が予定されているほか、同年度中に論文として発表される予定である。

##### (5)

本研究の大きな成果としては、18世紀-19世紀初頭のロシア文学を、風景表象という問題を媒介として考察することにより、当時のロシアにおいてピクチャレスクをはじめとする美学的文脈と、皇帝権力の主導による庭

園の造営や調査旅行といった点に現われた政治的・文化的文脈という二つの文脈の結びつきについて、ある程度説明することができた点を挙げるができる。既に口頭で報告済みのこの論点に関しては来年度以降に論文とする。

同時に、デルジャーヴィンやプーシキンといったこの時代を代表する作家たちの作品について新たな視点を提示することができた点も成果として挙げることができよう。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① Юсуке Торияма Живописность в описании обеденного стола в поэзии Г.Р. Державина（鳥山祐介「デルジャーヴィンの詩の食卓描写における絵画性」）、Новый филологический вестник（新文献学報知）、査読無、第4（11）号、2010年、7-17ページ。
- ② 鳥山祐介 プーシキン『スペードの女王』と光学劇場—「幻想性」のコンテクストをめぐって、SLAVISTIKA、査読有、第25号、2010年、1-16ページ。

〔学会発表〕（計4件）

- ① 鳥山祐介 1790～1810年代のロシアにおける旅行記：見出される境界線と風景への眼差し、シンポジウム [ディアスポラの近代—国境を超える歴史形成—]、2010年12月14日、千葉大学西千葉キャンパス
- ② 鳥山祐介 共通論題「啓蒙と専制」：「18世紀末-19世紀初頭のロシアにおける風景表象の様式、日本ロシア史研究会、2010年10月17日、立教大学池袋キャンパス
- ③ 鳥山祐介 エカテリーナ期—ナポレオン戦争期のロシア詩の中のヴォルガ、スラブ研究センター客員研究員セミナー、2010年3月17日、北海道大学スラブ研究センター
- ④ 鳥山祐介 18世紀末～ナポレオン戦争期のロシア詩におけるヴォルガ表象、ロシア文化研究会合同研修『ヴォルガ／ロシア』プログラム、2010年2月21日、財団法人 海外職業訓練協会研修施設

(OVTA)

[その他]  
ホームページ等

<http://home.u01.itscom.net/yusuke/articles-index.html>

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

鳥山 祐介 (TORIYAMA YUSUKE)

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号：40466694